

最後に「三位一体」について、複数の説教から、各ペルソナ相互の関係と、創造における各ペルソナと被造物との関係性、神とわれわれの関係におけるペルソナの位置付けについての多岐にわたるその諸相が紹介される。個々の論証についてはここでは省略する。

本書の研究篇は説教に見られる中心的概念についてのエックハルトの言説を解釈者の恣意を可能な限り避けて整合的に紹介しようという試みであり、それについての以上の評者の解釈は、著者の仕事についての可能な理解の一つに過ぎない。著者はあえて限定的な解釈を避けて、エックハルトの様々な問題提起を提示することで、第二部の説教を読む手掛かりと理解の広がりを読者に与えることを意図していると思われる。エックハルトの言う信仰の知解が、与えられた命題内で行われる哲学的な論述であるのか、それともあらゆる信仰命題の演繹を目指しているのか、そうだとしたらそれが実際にはどこまで、どのようになされているのかは、本書の提示する論点から出発して、ここに新たに正確に翻訳されたラテン語説教において、読者各自が探求すべきことであろう。

---

大森 正樹 著

『エネルギーと光の神学——グレゴリオス・パラマス研究』

創文社、2000年、xii+377+45頁

宮本久雄

著者大森氏は精神医学者として出発しつつ中世哲学研究に転向され、トマスやエックハルトに沈潜しその道行きの途上ロースキを介してビザンティンの神学者パラマスに出会ったといわれる。書評子の管見するところでは、如上の氏の道行きは正しく心に関わる参学であった。その参学は現代的知の手法（精神医学など）によっては満たされず霊（ブネウマ）の次元に参入するものであった。それはまた現代人の誰もが心密かに待望する次元の拓けであるともいえる。そのような意味での氏の参学の豊かな結実が本書なのである。

以下本書を概観しながらバラマスが心を通して披いた霊・エネルギーとは一体何であったかまた何であるのかを参究してみたい。

序は「ヘジカスムの博士」・14世紀のビザンティンの修道的神学者バラマスの生涯と著作の紹介にあてられている。第1部は、バラマス・バルラウム論争を手がかりに「東方神学の特質」をアポファティズム、神化、変容の光などのテーマによって際立たせる。それでは祈りの人であったバラマスを神学的哲学的思索に巻き込んだ上述の論争とはどのような事件であったのか。事件の発端となったのは、伊生れのギリシア人バルラウムによるアトス山のヘジカスト批判であった。すなわち当時アトス山の修道士はエジプトのマカリオス（4世紀頃）や新神学者のシュメオン（10世紀）などに遡る「イエスの祈り」によって心の平穩（ヘーシュキア）に達しその際「タボル山上でのキリスト変容の光」を見るとしていたが、その修業法はあごを胸につけ、呼吸を調整しつつ臍に精神集中し心身エネルギーの円満統一（アバテイア・ヘーシュキア）を求めるといった身体的姿勢を伴っていた。そこでバルラウムは神の光を現世でみることは異端メッサリア派（「祈る人々」というシリア語に由来し、祈りによって現世での神との感覚的な一致体験を主張。4世紀頃から記録され後代に影響）と同じだと彼らを非難し、その身体的非理性的修行法に因んでオンファロブシュコイ（臍に魂をもつ者達）と呼んで風刺した。西欧的教育を受けたバルラウムの思想はバラマスによって次の三点に要約されるという。

すなわち、(1)神の智慧は預言者や使徒と等しく哲学的諸学問に与えられている。(2)故に哲学的諸学問を通して理性が霊的真理に達しうる。(3)かくて真理認識の為、魂の情念の浄化（アバテイア）では十分でなく魂の無知の浄化、つまり学問をしなければならない、と。

以上の考えに拠りバルラウムは知的に無知な修道士を批判したのである。大森氏は以下「信を余技とする」この合理的批判を超克しようとするバラマスの神学および体験を考究しつつ東方的論理と霊性を明らかにしてゆく。

第2部はバラマス神学の精華であり問題点である「本質（ウーシア）と働き（エネルギー）の区別」を研究史をふまえ厳密に考察している。バラマスによれば「神のウーシアはそれ自身全く分かたれざるもの」なので人間の認識や言語的接近に対し超絶しているが、他方の「神のエネルギーは分かたれずして分かたれている」ので人間に分有参与される非被造物的な営みであるという。だからアトス山の修道士が見る

神の光とは、このエネルゲイアでありウーシアではないとバルラームに答えるわけである。しかしパラマスによるこの両者の区別は従来、神の単純性をそこなうとして批判された。現代の研究者もパラマスのウーシアとエネルゲイアがある仕方では同一であるが、しかしまた同一でない点やエネルゲイアが「部分に分かたれずして分かたれる」という点を挙げてパラマス思想の中に二律背反の無思慮な使用をみる（シュルツェ）。新奇で哲学的論証性に欠けるといわけである（ジュジーなど）。他方このパラマスの区別は東方的神秘体験に教義的基盤を与えることが主旨なので彼の二律背反的思想は東方的伝統に従っているという研究者もいる（ロースキイ）。むしろ *existentiel* なので体系的論証をパラマスに期待してはいけないといわけである（メリアンドルフ）。大森氏はバシレイオスの言う聖霊が「不受動的でありながら分かたれ、完全なままでありながら与りを得る」（『聖霊論』）者であり、パラマスのエネルゲイアがこの聖霊観を継承しそこに支えられてあることを伏線として述べた後、パラマスの体験の地平とその言表は如上の現代的研究者が二律背反とか超論理的とかいう学術用語を以ってパラマスの思索を説明しようとしている学的次元にはない点を参究してゆく。それは第3部の思索の方位と内容になっている。それは第3部が、第1章「ヘシカズムにおける神化の思想」、第2章「靈的感覺」、第3章「身体もまた折る」、第4章「光の神学と否定神学」という結構になっていることから窺いうるであろう。そこに大森氏のパラマス神学の洞察にかける情熱が最もよく垣間見られる。まず第1章の「神化」とは「IIペトロ」1章4節（神の本性に〈人〉が与る）に基づき「汎神論と紙一重で……緊張を孕む」ことであり、「単に道徳的、倫理的に優れた人間になる」のでも、隠れた能力の開発・発展の結果神的な者になるのでも（例えばヨーガなど）、理性的完成でもなく、まさに「身体をも巻き込んだ」神の恵み（エネルゲイア）への与りで、そのエネルゲイアを特に光として見ることだと語られる。その際この光の充溢の余り「神的暗闇」の中に没入するとも表現される。大森氏によれば、この「人間の神化」思想は西洋的なゲッセマネの苦悩の靈性（靈魂の暗夜）や十字架の神学などに比べると楽天的人間観である。続く第2章では、この見神体験は所謂「否定神学」的な知的方策と異なって「靈的感覺」によって現成するという。靈的感覺はオリゲネスが『箴言』2章5節の「神の知（epignōsis theou）を見出す」の箇所で「神の感覺（aisthēsis）」と修正考案した伝統がニュッサのグレゴリオスなどを経てパラマスまで伝わり、結局それは知的な神認識でなく「感覺が神的になり、その感覺を

もつことにより、神のことがあたかも感覚的に知るように知られる」「より直接的な知り方」であるとされる。この霊的感覚は「魂の情念的部分の浄化」(アバタイア)を前提とした感覚の聖化を含意し、聖霊(エネルゲイア)における見神である。これは第3章のテーマ「身体もまた祈る」に関連し、哲学的合理主義者バルラムの身体蔑視論に対するアンチ・テーゼとなり、ヘジカストの身体的な祈りの方法への強力な支持となっている。こうして人間を霊一魂一身体の三分法で考える東方教父は霊による「魂の情念的部分という身体との接点」の浄化により、全人的な聖化とさらに身体を通した物質界・自然宇宙の終末的神化にまで神化の射程を及ぼすのである。

ここでは神認識を類比や因果性や否定によって得ると説くバルラムの知的方法とは異なる、「イエスの名の祈り」を媒介にした神的光・エネルゲイアへの参与という観想(テオーリア)の地平が拓けている。

以上の点をふまえ大森氏は第4部においてエネルゲイアや光という言葉を用いて人間や世界の神化変容を語るパラマスの「論理」の特質に肉迫する。すなわち、氏はパラマスの言表様式の一例に「神的なるものは一でもあるが、一でもなく、正しくは両方であり、それらの各々は多くの違った仕方によって〈そうなのである〉」を挙げて次のように語る。

ここでの論法は「(A) 神的なるものは一である [一]、(B) 神的なるものは一でない [多]。だから、(C) 神的なるものは一でもあるし、一でもない」である。このような矛盾律を破る非常識な言表は、先述の「神のエネルゲイアは分かたれずして分かれる」にも見出されるという。パラマスの非論理を示した大森氏はそこで一体何を語りだしたいのであろうか。

ここで書評子の誤解を恐れぬ管見を述べさせていただくと次のようになるのではないか。すなわち、氏の言うように言葉は「この世界という枠の中にあり、感覚に依存し、その限りこの世界を超えることはできない」。そうした言語使用の世界はいわば「表層意識の世界」といえる。他方で重要なのは「神について語るのではなく……神との根源的な交わりを遂げること」であり、それは非・世界内在的体験を含み、それを言表するとは言語の限界を超えることなのである。観想する者の心・深層意識の次元の話である。表層意識からみるとこの深層意識を何とかして言表しようとする表現は、幻想・幻視・非論理ということになろう。だが東方的靈性は「神が人となり、人が神になる」という飛躍・矛盾から出発して、霊的世界の言語をそのまま日常生活

にもち込んだ。つまり、ロシアも含め東方は、「全く存在的に異なるものが一つになるという矛盾を……信の業として選びとり」それを今日まで生きている。この非西欧的靈性を参究すべく氏は教父や東方の論理を洗い直すという展望として、ロシアの東方キリスト教、シリア教、アブラハムを共通の祖とする宗教などにおけるエネルゲイア論の考究を提示している。それは「キリスト教という枠を越えて、人間にとっての根源的な営為の研究にもなりうる」という希望に満ちた展望である。

かくて本書はパラマスをめぐる古代哲学から教父に至る厳密なテキスト分析と現代の研究者の学説の比較を含む浩瀚な研究書である。しかしその奥に秘められた著者の靈的洞察を、書評子はどれほど汲み示しえたか、今は恐懼するだけである。最後に本書読了後、依然残る問いは書評子も難渋して語らざるをえなかった「東方の論理」の非西欧的矛盾がさらにどう暴かれるのかという点である。他方で本書には、現代に対して人間の心の畏るべき奥深さ、高さ、広さが宇宙的ヴィジョンと共に示され、世界内・非充足存在としての人間・心の限りない可能性が拓き示され、人みなに対するその参学への呼びかけがこだましている。